

# 気のいい火山弾

宮沢賢治

青空文庫



ある死火山のすそ野のかしわの木のかげに、「ベゴ」というあだ名の大きな黒い石が、永いことじいつと座<sup>すわ</sup>つていました。

「ベゴ」と云<sup>い</sup>う名は、その辺の草の中にあちこち散らばった、稜<sup>かど</sup>のあるあまり大きくない黒い石どもが、つけたのでした。ほかに、立派な、本とうの名前もあつたのでしたが、「ベゴ」石もそれを知りませんでした。

ベゴ石は、稜<sup>かど</sup>がなくて、丁度卵の両はじを、少しひらたくのぼしたような形でした。そして、ななめに二本の石の帯のようなものが、からだを巻いてありました。非常に、たちがよくて、一ペ<sup>おこ</sup>んも怒<sup>おこ</sup>ったことがないのでした。

それですから、深い霧きりがこめて、空も山も向うの野原もなんにも見えず退くつな日は、稜のある石どもは、みんな、ベゴ石をか  
らかつて遊びました。

「ベゴさん。今日こんにちは。おなかの痛いのは、なおったかい。」

「ありがとう。僕ぼくは、おなかが痛くなかったよ。」とベゴ石は、霧の中でしずかに云いました。

「アアハハハハ。アアハハハハハ。」稜のある石は、みんな一度に笑いました。

「ベゴさん。こんちは。ゆうべは、ふくろうがお前さんに、とうがらしを持って来てやったかい。」

「いいや。ふくろうは、昨夜ゆうべ、こっちへ来なかつたようだよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハハ。」稜のある石は、もう大笑い  
です。

「ベゴさん。今日は。昨日きのうの夕方、霧の中で、野馬がお前さんに  
小便をかけたろう。気の毒だったね。」

「ありがとう。おかげで、そんな目には、あわなかつたよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハハ。」みんな大笑いです。

「ベゴさん。今日は。今度新らしい法律が出てね、まるいものや、  
まるいようなものは、みんな卵のように、パチンと割ってしま  
うぞうだよ。お前さんも早く逃げたらどうだい。」

「ありがとう。僕は、まんまる大将のお日さんと一しよに、パチ  
ンと割られるよ。」

「アアハハハハ。アアハハハハハハ。どうも馬鹿で手がつけられない。」

丁度その時、霧が晴れて、お日様の光がきん色に射さし、青ぞらがいっぱいにあらわれましたので、稜のある石どもは、みんな雨のお酒のことや、雪の団子のことを考えはじめました。そこでベゴ石も、しずかに、まんまる大将の、お日さまと青ぞらとを見あげました。

その次の日、又また、霧がかかりましたので、稜石どもは、又ベゴ石をからかいはじめました。実は、ただからかったつもりだっただけです。

「ベゴさん。おれたちは、みんな、稜がすっかりしているのに、

お前さんばかり、なぜそんなにくるくるしてるだろうね。一いっしよ緒しよに噴ふんか火かのとき、落ちて来たのにね。」

「僕は、生れてまだまっかに燃えて空をのぼるとき、くるくるくるくる、からだがまわったからね。」

「ははあ、僕たちは、空へのぼるときも、のぼる位のぼって、一ちよ寸よつととまった時も、それから落ちて来るときも、いつも、じつとしていたのに、お前さんだけは、なぜそんなに、くるくるまわったろうね。」

その癖くせ、こいつらは、噴くだ火だで砕くだけて、まっくろな煙けむりと一緒に、空へのぼった時は、みんな気絶していたのです。

「さあ、僕は一向まわろうとも思わなかったが、ひとりでからだ

がまわって仕方なかったよ。」

「ははあ、何かこわいことがあると、ひとりでからだかふるえるからね。お前さんも、ことによったら、臆おくびょう病のためかも知れないよ。」

「そうだ。臆病のためだったかも知れないね。じつさい、あの時の、音や光は大へんだったからね。」

「そうだろう。やっぱり、臆病のためだろう。ハツハハハツハ、ハハハハハ。」

稜かどのある石は、一しよに大声でわらいました。その時、霧がはれましたので、角かどのある石は、空を向いて、てんでに勝手なことを考えはじめました。



ベゴ石も、だまって、柏かしわの葉のひらめきをながめました。

それから何べんも、雪がふつたり、草が生えたりしました。かしわは、何べんも古い葉を落して、新しい葉をつけました。

ある日、かしわが云いました。

「ベゴさん。僕とあなたが、お隣となりになってから、もうずいぶん久しいもんですね。」

「ええ。そうです。あなたは、ずいぶん大きくなりましたね。」

「いいえ。しかし僕なんか、前はまるで小さくて、あなたのことを、黒い途方とほうもない山だと思っていました。」

「はあ、そうでしょね。今はあなたは、もう僕の五倍もせいが高いでしょ。」

「そう云えばまあそうですね。」

かしわは、すっかり、うぬぼれて、枝えだをピクピクさせました。

はじめは仲間の石どもだけでしたがあんまりベゴ石が気がいいのでだんだんみんな馬鹿にし出しました。おみなえしが、斯こう云いました。

「ベゴさん。僕は、とうとう、黄金きんのかんむりをかぶりましたよ。」

「おめでとう。おみなえしさん。」

「あなたは、いつ、かぶるのですか。」

「さあ、まあ私はかぶりませんね。」

「そうですか。お気の毒ですね。しかし。いや。はてな。あなた

も、もうかんむりをかぶってるではありませんか。」

おみなえしは、ベゴ石の上に、このごろ生えた小さな苔こけを見て、云いました。

ベゴ石は笑って、

「いやこれは苔ですよ。」

「そうですか。あんまり見ばえがしませんね。」

それから十日ばかりたちました。おみなえしはびっくりしたように叫びました。

「ベゴさん。とうとう、あなたも、かんむりをかぶりましたよ。

つまり、あなたの上の苔がみな赤ずきんをかぶりました。おめでとう。」

ベゴ石は、にが笑いをしながら、なにげなく云いました。

「ありがとうございます。しかしその赤頭巾あかずきんは、苔のかんむりでしょう。

私ではありません。私の冠かんむりは、今に野原いちめん、銀色にやつて来ます。」

このことばが、もうおみなえしのきもを、つぶしてしまいました。

「それは雪でしょう。大へんだ。大へんだ。」

ベゴ石も気がついて、おどろいておみなえしをなぐさめました。「おみなえしさん。ごめんなさい。雪が来て、あなたはいやでしょうが、毎年のことで仕方もないのです。その代り、来年雪が消えたら、きつとすぐ又いらっしやい。」

おみなえしは、もう、へんじをしませんでした。又その次の日のことでした。蚊かが一疋びきくうんくうんとうなつてやつて来ました。「どうも、この野原には、むだなものが沢山たくさんあつていかな。たとえば、このベゴ石のようなものだ。ベゴ石のごときは、何のやくにもたたない。むぐらのようにつちをほつて、空気をしんせんにするということもしない。草っぱのように露つゆをきらめかして、われわれの目の病をなおすということもない。くううん。くううん。」と云いながら、又向うへ飛んで行きました。

ベゴ石の上の苔は、前からいろいろ悪口を聞いていましたが、ことに、今の蚊の悪口を聞いて、いよいよベゴ石を、馬鹿にしはじめました。

そして、赤い小さな頭巾をかぶったまま、踊りはじめました。

「ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

あめがふつても黒助、どんどん、

日が照つても、黒助どんどん。

ベゴ黒助、ベゴ黒助、

黒助どんどん、

千年たつても、黒助どんどん、

万年たつても、黒助どんどん。」

ベゴ石は笑いながら、

「うまいよ。なかなかうまいよ。しかしその歌は、僕はかまわな  
いけれど、お前たちには、よくないことになるかも知れないよ。」

僕が一つ作ってやろう。これからは、そっちをおやり。ね、そら、

お空。お空。お空のちちは、

つめたい雨の ザアザザザ、

かしわのしづくトンテントン、

まっしろきりのポツシヤントン。

お空。お空。お空のひかり、

おてんとさまは、カンカンカン、

月のあかりは、ツンツンツン、

ほしのひかりの、ピツカリコ。」

「そんなものだめだ。面白くもなんともないや。」  
おもしろ

「そうか。僕は、こんなこと、まずいからね。」

ベゴ石は、しずかに口をつぐみました。

そこで、野原中のものは、みんな口をそろえて、ベゴ石をあざけりました。

「なんだ。あんな、ちつぽけな赤頭巾に、ベゴ石め、へこまされてるんだ。もうおいらは、あいつとは絶交だ。みつともない。黒助め。黒助、どんどん。ベゴどんどん。」

その時、向うから、眼めがねをかけた、せいの高い立派な四人の人たちが、いろいろなピカピカする器械をもつて、野原をよこぎって来ました。その中の一人が、ふとベゴ石を見て云いました。



「あ、あつた、あつた。すてきだ。実にいい標本だね。火山弾の典型だ。こんなととのつたのは、はじめて見たぜ。あの帯の、きちんとしてることね。もうこれだけでも今度の旅行は沢山だよ。」  
「うん。実によくととのつてるね。こんな立派な火山弾は、大英博物館にだつてないぜ。」

みんなは器械を草の上に置いて、ベゴ石をまわつてさすつたりなでたりしました。

「どこの標本でも、この帯の完全なのはないよ。どうだい。空でぐるぐるやった時の工合ぐあいが、実によくわかるじゃないか。すてき、すてき。今日すぐ持つて行こう。」

みんなは、又、向うの方へ行きました。稜かどのある石は、だまつ

てため息ばかりついています。そして気のいい火山弾は、だまつてわらつて居りました。

ひるすぎ、野原の向うから、又キラキラめがねや器械が光つて、さっきの四人の学者と、村の人たちと、一台の荷馬車がやつて参りました。

そして、柏かしわの木の下にとまりました。

「さあ、大切な標本だから、こわさないようにして呉くれ給たまえ。よく包んで呉れ給え。苔こけなんかむしつてしまおう。」

苔は、むしられて泣きました。火山弾はからだを、ていねいに、きれいな藁わらや、むしろに包まれながら、云いました。

「みなさん。ながながお世話でした。苔さん。さよなら。さつき

の歌を、あとで一ぺんでも、うたつて下さい。私の行くところは、ここのように明るく楽しいところではありません。けれども、私共は、みんな、自分でできることをしなければなりません。さよなら。みなさん。」

「東京帝国大学校地質学教室行、」と書いた大きな札ふだがつけられました。

そして、みんなは、「よいしょ。よいしょ。」と云いながら包みを、荷馬車へのせました。

「さあ、よし、行こう。」

馬はプルルルと鼻を一つ鳴らして、青い青い向うの野原の方へ、歩き出しました。



# 青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1995（平成7）年5月30日11刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 気のいい火山弾

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>